川の子ども新聞

［利根川博士に聞く］

浅間山大噴火と利根川の関係とは？

ボトム　はかせー！　浅間山がたいへんだよー！

利根川博士　そうじゃな。きょねんの秋に噴火（中爆発）があって以来、まだまだ火山活動は活発なようじゃな。注意が必要じゃ。

ボ　浅間山って、よく噴火するの？

博　さよう。これまで浅間山はたびたび噴火をくりかえしてきた。

　そのなかでも江戸時代の天明3（1783）年におきた噴火は、有史以来もっとも大きなものだったといわれておるんじゃ。

「天明の大噴火」のおそろしさ

ボ　そんなにすごかったの？

博　ふむ。なにしろ、噴火による火砕流（※）でふもとの村（鎌原村）が全滅したくらいじゃからの。この火砕流は流れだしたとき、秒速150mものはやさだったと考えられておる。1秒間に150mじゃよ。

ボ　あっという間だね。

博　このとき流れだした溶岩を、いまも見ることができる。なんだと思う？

ボ　さあ…？

博　たぶん知ってると思うがの。鬼押出しじゃ。

ボ　あ、それ、ぼくも見たことある！

博　あれを見ると、そのときの噴火がどれだけすさまじかったか、すこしは想像できるかもしれんの。

（※火砕流＝火山からふきだした石のかけら、火山灰、溶岩のくずなどが、火山ガスをふくんで雲のようにふくれあがり、高熱をともなってなだれのように流れくだるもの）

鬼押出しは天明の大噴火のつめあと

火砕流は吾妻川から利根川へ

博　さらに火砕流は、北麓の斜面をず～っとくだって、吾妻川へ流れこんだ。

ボ　えっ、吾妻川まで？

博　おどろいちゃいかん。火砕流は吾妻川の水をすいこんでふくれあがり、さらにまわりの土砂もまきこんで、ものすごい泥流となって、利根川にまで流れこんだのじゃ。

ボ　うえーっ！

博　泥流は、さらに洪水をひきおこした。

　悪いことに、この大噴火（7月8日）の前から、利根川流域は大雨におそわれていた。それで、利根川はかなり増水していたんじゃ。

　こうして、泥流と洪水はいっしょになって、おそろしいいきおいで利根川沿岸の村々をおそったのじゃ。

　さらに泥流は利根川をず～っとくだり、河口（千葉県銚子市）から海へ流れでた。このとき、海は泥流のために、まっくろになったと伝えられておる。

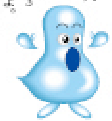
ボ　す、すごい…。

博　こうして、浅間山の大噴火は、火砕流から泥流、洪水をひきおこした。これらによってなくなった人は、2万人とも3万人ともいわれておるんじゃよ。

ボ　ものすごい被害だったんだね。

博　そのとおりじゃ。しかし、ボトム。被害は、これだけでおわらなかったのじゃよ。

ボ　え？　どういうこと？



はんらんしやすくなった利根川

博　浅間山の大噴火から3年あとのこと。天明6（1786）年に、江戸時代でもっとも大きな利根川の洪水がおきたんじゃ。権現堂堤（埼玉県幸手市）という重要な堤防がこわれて、江戸のまちまで大水がおしよせ、本所、深川、浅草などは水びたし。両国橋も流されてしまった。亀戸などでは、ふだんより3～4mも高いところまで水が来たと伝えられておる。

　この大きな洪水が、浅間山の大噴火のせいといわれておるんじゃよ。

ボ　えっ、なぜ？　だって、3年もたってるんでしょ。

博　それは、こういうことなんじゃ。

　さっき、泥流が河口から海へ出た、といったが、それは泥流の中の一部。ほとんどの泥流は、川の底につもったままだったのじゃ。もちろん、その中には、土砂だけでなく、噴火のときに流れでた火山灰や石のかけらなどもふくまれておる。

　そういう堆積物によって、利根川はそれまでよりもずっと河床（川底）の高い川になってしまったんじゃ。

ボ　ということは…。

博　さよう。雨などですこし水が増えただけでも、川の水があふれ、はんらんしやすくなってしまった、というわけなんじゃよ。

時間をかけて河床が上がる

博　さらに、天明6年の大洪水から5年後の寛政3（1791）年にも、そして、寛政12（1800）年、享和2（1802）年、文化2（1805）年…といったぐあいに、利根川は以前とくらべて、ひんぱんに大きな洪水のおきやすい川、つまり「あばれ川」になってしまったんじゃ。

　さっきも言ったとおり、それは浅間山の噴火のせいで、利根川の河床が上がったからなんじゃよ。

ボ　それは、いっぺんにそうなってしまったということ？

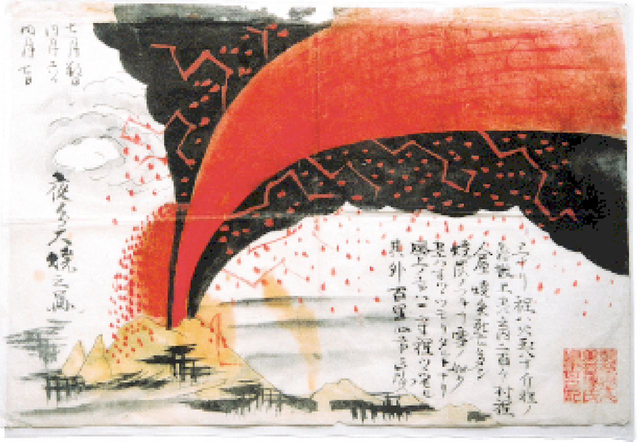
博　いや、それは、すこしちがうんじゃ。

　じっさいには、浅間山の噴火のあと、利根川の河床は、じょじょに上がっていったのじゃ。

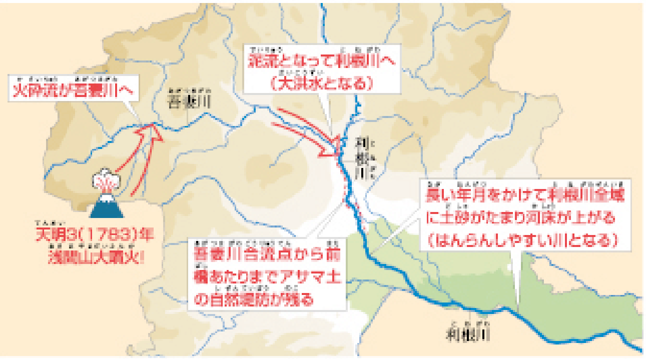
ボ　どうして？

博　つまり、はじめは上流にたまった土砂などが、だんだんに下流へ流れ、あるいは洪水のときにはまとまって流れる。そういうふうにして、かなり長い年月をかけて、しだいに下流の河床が上がっていったのじゃな。

きょねん秋の噴火以来、浅間山は活発な火山活動をつづけている（写真はことし1月さつえい）



天明3（1783）年浅間山噴火のようすを描いた江戸時代の絵（長野県小諸市・長谷川洋兵さん所蔵）／右下に「30里ほど（約120㌔）にわたって80丁ほど（約9㌔）の火玉が飛びちり、200カ村ほどの村で家が焼け、死者が出た」などと書かれている



火砕流が吾妻川へ
泥流となって利根川へ（大洪水となる）
吾妻川
利根川
長い年月をかけて利根川全域に土砂がたまり河床が上がる（はんらんしやすい川となる）
天明3（1783）年浅間山大噴火！
吾妻川合流点から前橋あたりまでアサマ土の自然堤防が残る
利根川

渡良瀬川合流点では60年後に

ボ　かなり長い年月って、どのくらい？

博　そうじゃな、川というのはだいたい下流にいくほど勾配（傾斜のどあい）がゆるやかになるからのう。そのぶん、土砂などが流れるスピードもおそくなる。

　たとえば、群馬県の中ではいちばん下流、利根川と渡良瀬川の合流するあたりでは、天明の大噴火からおよそ60年くらいたってから、河床が上がるのがはげしくなったといわれておるな。

ボ　60年もたってから!!

博　しかも、勾配がゆるやかということは、土砂などがなかなか流れないということじゃからの。こういうところでは、いったん河床が上がると、かんたんには下がらんのじゃ。

あとしまつは昭和までつづいた

博　ここで、ちょっと話をまとめてみよう。

　天明3年の浅間山の大噴火によって火砕流が発生し、土砂などが吾妻川をとおって利根川に流れこんだ。その土砂は、すこしずつ時間をかけて利根川の上流から下流へと流れていった。そのために利根川の全域にわたって河床が上がり、利根川ははんらんしやすい川になった。

　と、まあ、こういうことじゃな。

ボ　それで、そのあとは、どうなったの？

博　ボトム、よくぞ聞いてくれた！

　じつは、明治時代になっても、とくに利根川の中流から下流にかけては、土砂などがたまって河床が上がったままじゃった。

　そこで、土砂などを川底からとりのぞかなければならない（これを、むずかしいことばで浚渫という）。

　この工事は、明治時代の後半から大正時代、さらに昭和の初めにかけて、ず～っとおこなわれたのじゃ。

　つまり、江戸時代の浅間山大噴火は、その後およそ150年間にわたって利根川に影響をおよぼし、そのあとしまつは昭和の時代までつづいたということになるんじゃよ。

ボ　ふえ～っ。

いまも残るアサマ石とアサマ土

博　ところで、ボトムは、千葉県の成田山（新勝寺という大きなお寺がある）というところに行ったことがあるかな？

ボ　なあに、急に？　うん、行ったこと、あるけど…。

博　その成田山の石垣にはアサマ石という石が使われておる。それは、天明の大噴火のとき、浅間山からふきだしたものなんじゃ。それがゴロゴロと利根川をころがって、成田山のあたりまで流れていった、というわけじゃな。

ボ　えー、ホント？

博　群馬県でも、利根川沿いで、アサマ石を石垣にしている家はかなりあるということじゃよ。

　それから、アサマ土といって、浅間山からふきだした石のかけらなどがかたまったものがある。これは、利根川沿いに、いまも自然堤防というかたちで見ることができるんじゃ。

ボ　見に行きたーい！

博　よしよし。わしといっしょに、な。

ボ　はーい。

渋川市中村の武道館の駐車場にあるアサマ石。たてよこ約11m、高さ約5m。こーんな大きな石が吾妻川をとおって利根川へ運ばれてきたなんて、ちょっと信じられないね！

アサマ石は利根川ぞいのあちこちにいまも見られる。下は前橋の敷島公園で